

小松成美・著
『虹色のチョコレート 働く幸せを
実現した町工場の奇跡』

(四七二字)

「人を幸せにする経営」をテーマに全国の企業を紹介し、発売以来根強い人気を誇る「日本でいちばん大切にしたい会社」シリーズ。その第一巻でまさきに紹介された話題を呼んだのが、本著に登場するチョコレートのトップメーカー、日本理化学工業だ。社員の七割が知的障がい者で、その人たちが製造ラインのほぼ一〇〇パーセントを占めるという、世界でも類を見ない企業スタイルで知られる。

そうした表面だけをすくい取れば、美しい成功物語になるだろう。しかし本著の書き手はイチローや白鵬、中村勘三郎など、トップスターたちの核心に迫るルポルタージュで知られる小松成美氏。日本理化学工業がなぜ知的障がい者を受け入れ、どのようにして業界トップシェアを獲得したのか、経営者である大山一族と社員家族への取材を重ね、壮絶な人生模様を明らかにしていく。

想像を絶する苦難に見舞われながらも、社員を「突出した能力を持つ職人」として大切にする大山一族の覚悟と、働く喜びを全身で表現する社員たちの輝きに心を奪われる。「自分はずいぶん働いているのか」という思いにかられたときに読んでほしいドキュメンタリーだ。

(幻冬舎・一三〇〇円十税)

トーン・テレヘン・著 長山さき・訳
『ハリネズミの願い』

(四八〇字)

孤独、コンプレックス、ネガティブな思考……。生きていければ、こうした思いを抱え込むこともある。この本の主人公である一人ぼっちのハリネズミは背中へのハリがコンプレックス。森の動物たちへ「家に招待したい」と手紙を書いてはみたものの、いざみんなが家に来たときの不安が先立ってしまい、手紙を引き出しにしまい込んでしまう臆病者だ。

ハリネズミは頭の中で、次々に家へ訪れる動物たちとのやりとりを想像する。鋭いハサミでハリを抜いてしまうロブスター、大食らいのクマなど、よく考えたらどれもハリネズミにはありがた迷惑な訪問。ときには自身のハリが彼らを傷つけ、怖がらせることもある。「やっぱり招待はやめよう」と自分の行いを肯定し、安堵するその一方で後悔し、再び孤独に陥る。こうした複雑な思いを繰り返しながら、ハリネズミは背中へのハリがコンプレックスであると同時に自分の誇りでもあることに気づくのだ。

容姿、考え方、生き方はそれぞれに違って当たり前。他人の目や思いばかりを気にせずに、ときにはコンプレックスや孤独を、自分自身の誇りや自由に置き換えて生きていくのも大切だと思わせてくれる物語だ。

(新潮社・一三〇〇円十税)



『ハリネズミの願い』
トーン・テレヘン・著 長山さき・訳
新潮社



『虹色のチョコレート 働く幸せを実現した町工場の奇跡』
小松成美・編
幻冬舎

コトバの図書館

天高く馬肥ゆる秋

(五〇四字)

空気が澄みわたって空も高く感じられ、馬が食欲を増して肥え、たくましくなる秋の様子。秋の快適な気候をあらわす故事成語。出典は中国・前漢時代の歴史書『漢書』や、詩人・杜審言の詩『蘇味道(そみどう)に贈る』など。

秋の爽やかさを表現する決まり文句として、あまりにも有名なフレーズだ。確かに秋は寝苦しい夏から解放され、食べ物もおいしく感じられて心も体も充実する季節。思わず「天高く馬肥ゆる秋と申しますが……」と語り出したくなる。ところが、実はこの言葉、起源をたどると現代のようになんまりした意味ではないようだ。原文では「馬が肥える秋になると、何か事変が起きる。今年もその季節がやってきた」と、ただならぬ緊迫感で警戒を呼びかけている。古代中国では収獲の秋になると、辺境の騎馬民族が大挙して各地を襲撃し、略奪をくり返していたという。空気が澄み馬が肥えるのは、危機がすぐそばに迫っているというシグナル。いにしえの人々は秋の訪れとともに気をひきしめ、防備を固めたという。秋は集中力が増して、仕事がかどるが、それはほかのビジネスマンにとっても同じこと。爽やかな空気を楽しみながら油断せず、万全の態勢で勝負にのぞみたいところだ。